

發行者 野口孝

23歳頃の金栗四三
 (熊本市役所HPより)
 一年、東京女子師範学校(現東京学芸大学)の教員となつて体育を中心とした女子教育の

一九二〇年の第七回オリンピック・アントワープ大会に再びマラソンで出場。成績は振るわなかったが、大会後に訪れたドイツで、女性が男性と同じように様々なスポーツに取り組んで

道に進み、日本で最初の女子テニス大会、翌年には女子連合競技会という運動競技会を開催した。さらに二

運動競技の

今日突然なつて来た。

さて金栗は川越高女で生徒にどんなことを話したのだろうか。『校友会報』17号に記された講演内容をまとめると次の通りである。

「今日突然やつて来ました。貴女方ははずつと前から色々お世話になつて居ります。ですからお礼に上がらうと思つて二三年前から初めてオリンピックに参加したストックホルム大会の様子、自らの失敗談、そして女子がオリンピックに参加していることに深く感動したことなど述べ、当時日本社会では運動が、理解（立派な体格の人がたゞ走るのほもったいない、郵便物でも運べばいいのに、と

女子の体を丈夫にするにあらうと思ひます。幸い今日では学校の設備も大いに調つて貴女方も一生懸命やつてくださいますが、卒業後もその精神を忘れずに将来の国民たるべき者を指導して下さつたならば、数年後には身体的にも外国に劣らぬくらいになるでしょう。それなす。」と結んだ。

文部省の政策を担って講演

金栗は当時「オリンピックマラソンに三度出場」という経歴を持ち、その名は全国的に知られた存在であったであろう。その金栗が突然来校し、生徒の前で話をしたのである。

政府が国家発展のために女子体力向上の必要性を打ち出し、そのようなことを背景として川越高女でも運動部の活動が始まったことを紹介した。

府立第四高女との頻繁な

『校友会報』の「校内行事」欄には「10月21日 文部省嘱託金栗四三氏、体育に関する講演」とあるから、金栗は文部省の政策を担う存在として講演したのである。

「川女歴史探報」16号で、一九一八年に、